

江戸初期諸文献による男色史

The History of Male Love as
Depicted in Early Edo Period Writings

Paul SCHALOW *

Scholars of Edo Period literature generally evaluate mid seventeenth-century kana-zōshi (“books written in kana”) as representing a necessary developmental phase towards the more literarily sophisticated ukiyo-zōshi (“books of the floating world”) that appeared later in the century, but the exact nature of that developmental process has not yet been studied in much detail. This paper discusses several important kana-zōshi that treat the topic of nanshoku (male love) to show that they indeed established a way of describing male love that exerted a major influence on subsequent writings.

Kana-zōshi writers gathered and incorporated a substantial amount of information about nanshoku into their history of male love, including references to Chinese emperors, to Buddhist legends, and to Japanese homoerotic literature. Two particularly influential components were the story of the Chinese poet Su Shih (Tong-p'o),

* Paul SCHALOW ラトガーズ大学助教授。国際交流基金フェロー。訳書に「井原西鶴の男色大鑑」、論文に「空海と日本仏教における僧侶の男色の伝統」等がある。

who wooed and won a handsome boy at “wind and water cave,” and the legend that attributed Kūkai with the introduction of male love to Japan from China in the ninth century. These stories and others were reported and embellished by kana-zōshi writers in their task of devising a history of male love.

The literary process whereby kana-zōshi writers established a commonly accepted discourse for nanshoku represented a complex group effort, and the impact of that effort on ukiyo-zōshi is discussed with regard to two of Ihara Saikaku’s works, *Kōshoku ichidai otoko* and *Nanshoku ōkagami*. The paper concludes by suggesting that the importance of kana-zōshi’s influence on ukiyo-zōshi and subsequent literature deserves greater recognition.

江戸初期の仮名草子は、十七世紀後半に現われた浮世草子への発展に欠かせないものとして評価されてきました。文学としての水準が浮世草子ほど高くななくても、仮名草子はそれなりに大事な基盤作りの役割を果たしているというふうに考えられています。しかし、浮世草子への発展の段階が具体的にどういふものかは、まだ十分に研究されていません。今日は、この浮世草子への発展に伴う基盤作りのプロセスを考えるために、男色の問題をテーマとした仮名草子をいくつか紹介したいと思います。

文献として、次の五つの作品をとりあげます。

- a. 『犬つれづれ』、写本元和五年（1619）；刊本承応二年（1653）。
- b. 『田夫物語』、刊本寛永年間（1624–43）。
- c. 『心友記』、刊本寛永二十年（1643）；改題再版本『衆道物語』、寛文元年（1661）。
- d. 『よだれかけ』（巻五・六『男色二倫書』）、執筆承応二年（1653）刊本

寛文五年（1665）；改題再版本『男色実語教』、元禄十三年（1700）。

- e. 『岩つつじ』、執筆延宝四年（1676）；刊本正徳三年（1713）；写本安永四年（1775）；改題再版本『歌人漫筆』、嘉永二年（1849）。

男色のテーマは、近世以前の説話文学や稚児物語のなかに見られますが、江戸時代までは、その過去の資料があまり問題にされなかったので、男色の歴史に対する知識が極めて低かったようです。文学の上では、男色は歴史のないものだったと言っても差しつかえはないと思います。男色はどこから来たか、過去に男色関係の例があったか、その資料は何か。そのような問題は全部、江戸初期の仮名草子によって初めて、文学のテーマとして明らかにされたのです。

仮名草子の作者達は歴史の資料、つまり故事、逸話、伝説などを探り出して、それらの資料を整理することによって、一貫性のある「男色史」を仕上げました。歴史的故事や伝説をただ伝えただけではなく、その資料を自由に利用して男色の描き方を確立したのです。それぞれの文献には、目的が違うから多少の差はありますが、一般に見て、この男色史は、仮名草子の作者達が集団で作上げた成果だと言えるでしょう。

では男色の資料にはどんなものがあったのでしょうか。主に、二種類に分けることができます。一つは、中国の古典から取った男色関係の故事、もう一つは仏教の男色伝説の二種類です。今日は、それぞれの種類の例を、一つずつ紹介したいと思います。一つは、蘇東坡と李節推の男色関係の逸話と、もう一つは弘法大師の男色伝授説です。

1. 中国の男色故事：「風水洞」

中国の男色故事で、仮名草子によくでてくるのは中国の詩人蘇東坡が李節推という美少年にほれてしまい、風水洞というところまで跡を追う話です。この逸話は、東坡の詩を紹介する古活字本『四河入海』が、慶長・元和年間に出版されてから、日本に広く知られるようになったようです。仮名草子の用例をい

くつか見て、浮世草子への取り入れ方を明らかにしたいと思います。

元和五年（1619）の『犬つれづれ』には東坡と節推のことはありませんから、まだあまり普及していなかったことが分かりますが、寛永二十年（1643）刊の『心友記』にはちゃんとでています。『心友記』は仮名草子によく見る「問答」の形を取っています。「古き昔の事に、主童の沙汰は承はらぬなり」という質問に対して、次の答えがあります。

「古き沙汰に主童の事はなきとや。昔も、大唐の鄭の莊公は子都を愛、衛の靈公は弥子瑕を愛、魏の哀王は竜陽君を愛、漢の高祖は籍儒を愛、漢恵帝は周儒を愛、同じく武帝は李延年を愛、哀帝は董賢を愛、文帝は鄧通を愛、東坡は節推を愛。」

この九つの例のうち、最後の東坡と節推を除いて、すべて中国の史書から知られる古代中国の皇帝の男色関係です。ここでは、「昔の男色の話は聞いたことがないから、存在していただろうか」と言う疑問に対して、九つもの例をあげて、「これだけの例がありますよ」と答えています。そして、東坡と節推のこともその一つの例に入れられています。

『心友記』と同じ寛永年間に出版された『田夫物語』にも、東坡と節推の男色関係のことがあります。『田夫物語』は、問答と似た「男女優劣論」の形を取っています。男色派と女色派がそれぞれ討論するのですが、女色派が男色を「非道」（間違っただ）と言ってけなすのに対して、男色派が次のように言う場面です。

「若道の非なるということ聞こえまじ。されば、釈迦にも阿難あり、孔子にも顔回あり、東坡にも李節推とて若衆あるかや。さやうに非なる道を釈迦や孔子も好きたまうべきや。」

東坡と節推のほかに、仏教の釈迦の弟子、阿難と、孔子の弟子、顔回のことを男色関係に作り替えて、非難から守るために利用しています。大陸の前例を挙げて非難を防ぐという使い方をしているのです。

承応二年（1653）執筆の『よだれかけ』巻五に、東坡と節推の事が次のよう

に詳しく書いてあります。「李節推をたどりて風水洞にいたり、騎馬少年清且宛なりといひしは、蘇東坡にこそ侍れ。」『よだれかけ』の作者が、東坡の詩の句を引用しているのは、きっと古活字本の『四河入海』からこの逸話を知ったからでしょう。

北村季吟の作品で『岩つつじ』（1676）という男色を詠んだ和歌や物語ばかりを集めた本がありますが、私の知っている限り、これが世界文学史上初めての男色文学集です。この中で、『徒然草』の四十三段と四十四段を紹介した後、季吟が林羅山の文章を引用した部分にこの風水洞のことがあります。

「羅山氏抄云、此段と上の段とをみれば、東坡が李節推を尋ねて、風水洞に遊びし景気あるやうに覚へ侍と、男色の事は歴代の中に多く見えたり、云云、古人未発の説、いとめづらかなれば、用ひてここに書加へ侍りし。」季吟が引用した説は、羅山の『徒然草』の注釈、『野槌』（上の四）に書いてありますが、四十三段と四十四段には男色の臭いがするという意味で、「風水洞に遊びし景気がある」と羅山が書いたようです。そうすると、男色を示す代表的な故事として利用した、ということになるわけです。季吟は、この説がなかなか面白いと思って、『岩つつじ』に載せたといっていますが、「古人未発」ですから、『徒然草』に男色として捕らえる段もあると指摘したのは、季吟から見れば、羅山が初めてだったようです。

このように、風水洞の故事が、仮名草子の男色史に定着したわけです。そして、井原西鶴の処女作『好色一代男』（1682）に、西鶴がこの故事をいよいよ浮世草子風に取り上げました。仮名草子によって常に広く知られた逸話だから、『一代男』のなかでその話を伝えるとか真似るだけでは面白くない。俳諧の感覚の強い西鶴がきっとそう思って、パロディーに転化したのでしょう。東坡が美少年の李節推の後を追って、とうとう結ばれる話を引っくりかえして、十才の世之介が男性の恋人を求めてその後を追ひ、最後にふられてしまうという滑稽なパロディーにしてみせます。これがまさに浮世草子と仮名草子の違いではないでしょうか。仮名草子の作者が作り上げた基盤の上に立って、浮世草子

の作家西鶴が面白い文章を書いているのです。

2. 仏教の男色伝説：弘法大師男色伝授説

仮名草子には仏教の男色伝説が多くありますが、中でも男色の歴史を描くうえでもっとも重要なのは、弘法大師の男色伝授説です。俗説では、弘法大師が九世紀の初めに男色を中国の寺院から日本に伝えたと言い伝えられてきました。あくまでも俗説だから、事実関係は怪しいのですが、このような伝説が仮名草子などによって広く伝えられたこと自体が、非常に面白いことだと思います。男色が寺院に定着していたことは当時の常識だったようだし、民族の崇拜を受けた弘法大師が、それを好んだというふうに一般人が信じていたようです。

『犬つれづれ』という本は、徒然草を男色に書きかえた稚児教訓の作品ですが、ここにも弘法大師の説が数か所にでています。

一か所には、「されば、かくありがたき法を好まん人をば、此国の仏祖真言大師喜び給いて、極楽浄土のまん中へ引導し給はんと、のたまひしとなり。」弘法大師が真言宗の創立者だから、ここで「仏祖真言大師」と呼ばれていますが、この文章によると、弘法大師は男色を好む人のことを喜んで、極楽へ導いてくださると言っています。「極楽」というのはこの場合、宗教的な話ではなく、性的な意味で性行為の極点と解釈していいと思います。ここでもまた、男色を維持するために、この伝説を利用しているようです。

もう一か所は、次のように書いてあります。「むかしの人は、此道をないがしろにせしや。されども又此国へは高野の空海伝へきたる。なりひらのわらべは、曼荼羅といひしとき、でしとして寵愛したまふとも語りつたふ。」

ここで、「昔の人は男色を軽べつしていたのだろうか」という反語に対して、「いや、そうではない。男色は空海が伝えたのだ。そして空海が在原業平を弟子として寵愛した。だから、昔の人はきっと男色を軽べつしていなかっただろう」と、男色を支えるために、またこの伝説を利用しているわけです。

もう一つ弘法大師の名前がでるのは、一休の漢詩です。「大徳寺の一休和尚

は、目に見え手にとらるる程のものを、詩とかいふ物に作り言はれし中にも、なおし此道にあやしくすきて、大聖文殊初活開、金剛弘法再興來、無陰陽如円通境、得入人々呼善哉、弘法伝へきたられし道なれば、皆此国の人たるものは、心に忘るる事勿れとぞ。」

つまり、一休の詩によると、文殊菩薩が男色を開始し、弘法大師がそれを日本で再興した。そして、男色関係は、女も関係ない喜びを男性に与えるということを行っています。『犬つれづれ』は稚児教訓の本ですから、最後に「男色は弘法大師が伝えて下さった道だから、日本の男達はそれを忘れてはなりません」と警戒しています。若い人を戒めるために、この伝説を利用したわけです。

『心友記』と『田夫物語』には、弘法大師の説は載っていません。しかし、『よだれかけ』には、日本の男色の故事を紹介している中に、一休和尚の詩が、やはりあります。「一休和尚、此みちにはあやしきすきにて、若衆への艶詩どもおほし。又一休が書かれし物の中に、大聖文殊初活開、金剛弘法再興來、とあれば、弘法大師は此道の中興開山とやいはん、まだしらずかし。」

最後の「まだ知らずかし」（よく分からない、確実ではない）から考えると、『よだれかけ』の作者はこの説の事実関係を少し疑問に思っているようですが、一休和尚が大変な男色好きだと言ってから、詩を紹介するという、話の運び方が『犬つれづれ』とよく似ています。

『よだれかけ』の作者は、中国の男色故事を数多く紹介してから、日本の男色故事を紹介しています。第一に出している例は、弘法大師関係の例です。「本朝にも淳和の時なりけん、弘法大師の弟子なりし真雅阿闍梨は、おもひ出る常磐の山のいはつつじ、いはねばこそあれ恋しきものを、とよめるは、在五中将業平の、まだわらはにて満陀羅といひし時、恋詫びてつかはされし歌なり。」

この「おもひ出る常磐のやま」という和歌は『古今集』恋の十一巻にのっている歌ですが、その作者は「読人不知」になっています。いつから男色の歌として読まれるようになったかは、明らかではありませんが、北村季吟の『岩つつじ』の題は、この和歌から取ったものです。『岩つつじ』の序に、季吟が男

色を歌う和歌を探して、この作品に集めたということが書いてあります。そして、次の文章があります。

『古今和歌集』のなかには、高野大師の御弟子、真雅僧都の、ときはの山の、ひと歌あり。」

そして、本文に入ると第一に引用しているには、この和歌です。季吟は丁寧な学者ですから、和歌のあとにその出典を紹介しています。

「この歌、北畠准后親房『古今抄』云、真雅僧都の業平につかはしける。弘法大師弟子貞観寺僧正と号す。」

季吟のいう北畠親房の『古今抄』は、後村上天皇の命令で作られた『古今集註』のことで、親房が二条家や藤原定家などの古今集秘伝をこの中に収めましたことから、この説がそのうちの、どの資料からか伝わったのでしょうか。

このように、弘法大師の男色伝授伝説が、江戸初期の文献では、弟子の真雅僧都にまで及ぶようになったのです。井原西鶴が『男色大鑑』にもこの伝説を数か所に利用しました。蘇東坡と李節推の風水洞の逸話を『一代男』のなかでパロディー化して書き換えたように、西鶴はこの伝説を浮世草子風に面白く取り入れています。

『男色大鑑』巻一の一には、西鶴が男色の故事を色々と紹介してから、男色と女色を比較して、西鶴なりの「男女優劣論」を述べています。そのあとに次の文章があります。

「この道のあさからぬ所を、あまねく弘法大師のひろめたまわぬは、人種を惜しみて、末世の衆道を見通したまえり。」つまり、寺院以外に広めなかったのは、弘法大師が人種の絶滅を恐れたからだ、男色はこれだけ魅力的なものだ、というふうに西鶴がユーモアをこめて言っているわけです。これも結局は男色を維持するために、この伝説を使っているのですが、西鶴のアイロニーが仮名草子の上に成り立っているような気がします。

こうして、男色のテーマを色々な仮名草子を通して見てみますと、仮名草子によって定着した逸話、伝説などが基盤となって、浮世草子の発展に役立った

ことが分かると思います。この基盤は浮世草子にばかり役立ったものではなく、江戸後期の戯作をも支える、しっかりしたものでした。これからも、江戸文学の研究者がその影響を明らかにすることを期待しています。

補 注

1. 仮名草子。Books written in kana.
2. 浮世草子。Books about the floating world.
3. 男色 (なんしょく)。Male love.
4. a. 『犬つれづれ』、写本元和五年 (1619)；刊本承応二年 (1653)。
b. 『田夫物語』、刊本寛永年間 (1624-43)。
c. 『心友記』、刊本寛永二十年 (1643)；改題再版本『衆道物語』、寛文元年 (1661)。
d. 『よだれかけ』(巻五・六『男色二倫書』)、執筆承応二年 (1653) 刊本寛文五年 (1665)；改題再版本『男色実語教』、元禄十三年 (1700)。
e. 『岩つつじ』、北村季吟著。男色文献集。執筆延宝四年 (1676)；刊本正徳三年 (1713)；写本安永四年 (1775)；改題再版本『歌人漫筆』、嘉永二年 (1849)。
5. 蘇東坡。Su Shih (Tong-p'o)。
6. 李節推。
7. 風水洞。The wind and water cave.
8. 『四河入海』。笑雲清三著。蘇東坡詩の講述書。古活字本。
9. 慶長、元和年間 (1596-1623)。
10. 『心友記』：
 - a. 「古き昔の事に、主童の沙汰は承はらぬなり。」(古い昔のことに、男色の話は聞いたことがない。)
 - b. 「古き沙汰に主童の事はなきとや。昔も、大唐の鄭の莊公は子都を愛、衛の靈公は弥子瑕を愛、魏の哀王は竜陽君を愛、漢の高祖は籍孺を愛、

漢惠帝は周孺を愛、同じく武帝は李延年を愛、哀帝は董賢を愛、文帝は鄧通を愛・東坡は節推を愛。」(古い話に、男色のことがないというのか？昔も…………)

11. 「男色優劣論」。Debating the relative merits of boys versus women as lovers.
12. 男色派と女色派。Men who advocate boys as lovers and men who advocate women as lovers.
13. 「非道」(間違っただ)。The mistaken way.
14. 『田夫物語』:「若道の非なるということ聞こえまじ。されば、釈迦にも阿難あり、孔子にも顔回あり、東坡にも李節推とて若衆あるかや。さやうに非なる道を釈迦や孔子も好きたまうべきや。」(男色が間違っているということは納得できない。釈迦には阿難、孔子には顔回、東坡には李節推という若衆の恋人があったのではないか。そなたのいうように間違っただ道を釈迦や孔子がお好きなのはありますか。)
15. 『よだれかけ』:「李節推をたどりて風水洞にいたり、騎馬少年清且宛なりといひしは、蘇東坡にこそ侍れ。」(李節推の跡を風水洞まで追って「馬に乗っている少年、美しく、きれいだ」と書いたのは、まさに蘇東坡だ。)
16. 『岩つつじ』:「羅山氏抄云、此段と上の段とをみれば、東坡が李節推を尋ねて、風水洞に遊びし景気あるやうに覚へ侍と、男色の事は歴代の中に多く見えたり、云云。古人未発の説、いとめづらかなれば、用ひてここに書加へ侍りし。」
17. 『野槌』。林羅山著。『徒然草』の注釈書。
18. 『好色一代男』(1682)。井原西鶴著。浮世草子。
19. 弘法大師。空海(774-835)。高野山に真言宗の金剛寺を創立した。
20. 『犬つれづれ』:
 - a. 「されば、かくありがたき法を好まん人をば、此国の仏祖真言大師喜び給ひて、極楽浄土のまん中へ引導し給はんと、のたまひしとなり。」

(こんなにすばらしい教えを好きな人のことを、日本の真言宗の創立者弘法大師がお喜びになって、「極楽浄土の真ん中へ導いてあげます」とおっしゃったのだ。)

- b. 「むかしの人は、此道がないがしろにせしや。されども又此国へは高野の空海伝へきたる。なりひらのわらはべ、曼荼羅といひしとき、でしとして寵愛したまふとも語りつたふ。」(昔のひとは男色を軽べつしていたのだろうか。しかし、男色は空海が日本へ伝えてきた。まだ曼荼羅という子供のときの在原業平を弟子として寵愛なさったとも言い伝えられている。)
- c. 「大徳寺の一休和尚は、目に見え手にとらるる程のものを、詩とかいふ物に作り言はれし中にも、なおし此道にあやしきすきて、大聖文殊初活開、金剛弘法再興来、無陰陽如円通境、得入人々呼善哉、弘法伝へきたられし道なれば、皆此国の人たるものは、心に忘るる事勿れとぞ。」(大徳寺の一休和尚は、あらゆるものを詩に作ったが、その中でも特に男色が不思議なくらい好きだった。……男色は弘法大師が伝えて下さった道だから、日本人であるかぎり、それを忘れてはならない。)

21. 『よだれかけ』:

- a. 「一休和尚も、此みちにはあやしきすきにて、若衆への艶詩どもおほし。又一休が書かれし物の中に、大聖文殊初活開、金剛弘法再興来、とあれば、弘法大師は此みちの中興開山とやいはん、まだしらずかし。」(一休和尚も、男色は不思議なくらい好きで、若衆に送った恋の漢詩が多い。そのなかに、大聖文殊初活開、金剛弘法再興来、というのがあり、そのため弘法大師は男色の創立者と呼ばれるが、それは本当かどうか分からない。)
- b. 「本朝にも淳和の時なりけん、弘法大師の弟子なりし真雅阿闍梨は、おもひ出る常磐の山のいはつつじ、いはねばこそあれ恋しきものを、とよめるは、在五中将業平の、まだわらはにて満陀羅といひし時、恋詫び

てつかはされし歌なり。」

22. 『古今和歌集』。恋十一巻、#495。「読人不知」。
23. 『岩つつじ』：
 - a. 「『古今和歌集』のなかには、高野大師の御弟子、真雅僧都の、ときはの山の、ひと歌あり。」
 - b. 「この歌、北畠准后親房『古今抄』云、真雅僧都の業平につかはしける。弘法大師弟子貞観寺僧正と号す。」
24. 『古今集註』（『古今抄』）。北畠親房著。後村上天皇の命令で作られた。二条家や藤原定家の密伝を含む書。
25. 『男色大鑑』（1687）。井原西鶴著。浮世草子。
26. 『男色大鑑』：「この道のあさからぬ所を、あまねく弘法大師のひろめたまわぬは、人種を惜しみて、末世の衆道を見通したまえり。」（弘法大師が男色のすばらしいことを、もっと広く教えなかったのは、人種の絶滅を恐れて、この末世に男色が流行するのを見通しなされたからだ。）

討議要旨

武井協三氏から、仮名草子から浮世草子への間に立つものとして、「野郎評判記」があるので、注目されると良いのでは、という提言があった。

進藤英毅氏からも、性別を越えた人間の性愛についての質問がなされた。